

## 海を渡ったふたつの富士山 その一

〈静岡県富士山世界遺産センター学芸課長兼教授 松島 仁〉

富士山を中央に三保松原と清見寺を右左に配する富士山絵画の構図は、室町時代に<sup>さかのぼ</sup>遡ります。その代表例である伝雪舟筆「富士三保清見寺図」(永青文庫蔵)は、日本平にあった久能寺辺りから望んだ景で、江戸時代初期までには富士山絵画の規範と仰がれるようになります。伝雪舟作品の構成は狩野探幽<sup>たんゆう</sup>(1602~1674)により換骨奪胎<sup>かんこつだつたい</sup>されたうえ定型化され、江戸時代を通じて流派を越境しつつ富士山を描く際の基本構図となります。

探幽による〈富士三保清見寺〉の定型としては、寛文7年(1667)制作の「富士山図」(静岡県立美術館蔵)がよく知られていますが、実は六曲一双という大画面による探幽の〈富士三保清見寺〉が2点、海を渡り遥かアメリカに所蔵されているということは、余り知られていません。

私は2017年3月にアメリカ最大のアジア学会 Association of Asian Studies (AAS)での発表、2025年4月に公益財団法人鹿島美術財団の助成をいただいて渡米の機会をもち、2つの屏風を間近に調査することができませんでした。

本コラムでは2回にわたり、海を渡った狩野探幽<sup>けんさく</sup>の傑作についてお話ししましょう。まず先月調査の機会を得たサンフランシスコ・アジア美術館に所蔵の「富士三保清見寺図屏風」(<https://searchcollection.asianart.org/objects/9569/the-beach-at-miho?ctx=b39df1435033683afdc0fa2ee9c3385db58cc018&idx=4>)は、デトロイト出身の資産家エイヴリー・ブランデー(1887~1975)が収集した作品です。陸上選手でもあったブランデーは、1952年から1972年まで第5代国際オリンピック委員会会長をつとめ、日本のIOC復帰そして東京大会開催にも尽力した人物です。そんな彼が収集した探幽の富士山は、「法印探幽行年六十五歳筆」<sup>かんき</sup>の款記をとまなう寛文6年(1666)の作例です。

江戸前期の譜代大名松平直矩<sup>なおのり</sup>が記した『松平大和守日記』寛文7年6月24日条によれば、探幽の富士山図は「探幽法印来対、富士山絵頼候へは余人へハ、大形ノ事ニテハ調不申候へ共、予事ニテ候間、相心得旨云也」ほど貴重なもので、直矩は自家の宿願だった姫路への転封に際し、探幽の「清見寺三保松原、辺細画田子浦」をもとめ、祝いの席で掛けています。

こうしたなか赤金・青金織り交ぜた切箔で煌びやかに加飾し、画中には意匠的な三日月を<sup>ぎんてい</sup>銀泥で描くなど、室町後期のやまと絵屏風を転生させたような画面構成をとるアジア美術館本は、水墨により描かれた一連の〈富士三保清見寺〉とは一線を画します。アジア美術館本では、富士山は胡粉<sup>こふん</sup>を引いて表され、三保松原や清見寺周辺の景も緑青や朱、代赭(茶色)など極彩色で描写されます。

将軍徳川家慶の御立寄(略式の御成)に備え修繕されたことが添状に記録される探幽筆「源氏物語 賢木・滯標図屏風」(出光美術館蔵)と同じ謹直な楷書体による行年書落款<sup>ぎょうねんがさらつかん</sup>が記され、かつ菊紋<sup>きくもん</sup>の金具を備えるアジア美術館本は、京都の朝廷への進上も含めた特別な機会に制作された可能性も考慮されます。

今後は周辺史料を博搜しながら、この屏風についてプロファイリングしていく予定です。

